

1. 艇を理解する方法

説明を受けながら、実物をさわる。

どこどこを、説明ポイントとして押さえるか。

説明を受けながら、模型をさわる（アクセシビリティの模型を作る必要がある）。

それ以外の方法はないか（パソコンで立体をなごる方法など。大がかりな、お金がかかる方法でなく）。

2. 地形を理解する方法

言葉で説明する方法のポイント

自然界や街の音と言葉の説明だけで、大まかな地形を伝える場合のポイント

視覚的なランドマークに代わる、サウンド・ランドマークは何か。

あらかじめ、パソコンで地図を伝達する方法がないか。

3. ヨットの位置把握の方法

浜の方向を知る方法

波が岸に打ち付ける音や岸の人声だけで難しい場合に、2点の音源（鳥の声など）を置くなど

沖の行動範囲（目的）を知る方法

2点、3点の音源を浮き（ブイ）に付けて浮かべるなど（往復、3点間の移動などの目標とする）

4. ブームの位置を知る方法

帆端にバタバタする布などをつける。

密着せずに、バタバタ、帆についたり離れたりする方法が可能か。

ブーム端に、鈴などをつける。

できれば、やさしい音のもの。

風が強いと、帆綱（メインシート・ロープ；通常、メインシートと略す）の張り具合とスピード感、艇の傾きで理解できるが、風が弱い場合が問題。

5. 艇のスピードを知る方法

早い時は、風や波を切る音でわかる。

風が弱く、スピードが遅い時は、手を水に漬けて確かめる（メインシート・ロープとジョイスティックを片手で同時に持って）。

5. 衝突・トラブル防止の方法

基本的には、音源位置に旗を立てて、活動範囲を決めて、相手に注意してもらう。

マークなどを決めて帆の先端などにつけ、相手によけてもらう（回避行動の役割）。

小型ヨット、ウィンドサーフィン、カヌー、水上バイクの人たちに呼びかける。
海水浴客に突っ込んだり、釣り人とトラブルにならないよう、主催者が活動範囲の設定に気をつける。その設定範囲を出ないように、レシーバーやレスキュー艇などで注意する。

6. 艇への連絡体制

小型レシーバー

簡単な操作のいいもの（要防水）を、見つける必要あり。

小型ハンドマイク

範囲が限定されるので、レスキュー艇が必要。

7. インストラクターの注意事項

事前に、基礎的な資料を参加者にメールで送っておく。

セイラビリティ・ジャパンで、今後、作成する必要あり。

視覚障害者の試乗会マニュアルにもとづき、試乗を実施する。

セイラビリティ・ジャパンで、今後作成し、インストラクターやボランティアに徹底を図る必要あり。

8. アクセスディンギー利用の方法

- (1) 基本的には、視覚障害者や他の障害者、障害のない人が一緒に遊ぶ水辺の活動をめざしたい。

順番に教えながら2人で乗るので、より多くの人は何人も参加できる。

視覚障害者が、自分一人（あるいは2人）で乗る場合にも、他のアクセスディンギーやカヌーが出ている方が、声をかけ合うなど、安心・安全である。

- (2) また、ただアクセスディンギーに乗って遊ぶだけでなく、「水辺のバーベキューや自然観察など、デイキャンプを楽しむ活動の一環に小型ヨットやカヌーがある」というように、アウトドアライフを誰もが楽しめるようにしたいと考える。この部分は、雛元の意見。